

軍隊手帳



軍隊手帳とは軍人が所持する手帳で、軍人としての身分証明書と履歴書を兼ねていた。手帳の中には軍人勅諭（昭和期のものは明治、大正、昭和天皇の三種）・教育勅語・讀法・誓文・軍隊手帳に係る心得・戦陣訓（一九四二年以降の版に掲載）・経歴・入隊から除隊までの経歴や賞罰・部隊号・兵科・階級・得業・戦時着装被服のサイズ（帽、衣袴、外套、靴）・本籍・住所・氏名・生年月日・身長などが書かれていた。軍人は手帳の記載事項を全て暗記することを要求された。戦後は焼却するようになっていた。云われたので現存する手帳は少なく、後に傷病兵への年金支給の申請に軍人手帳が必要書類となつたが、焼却や紛失していたケンスが多く大都市でトラブルになつたと云われている。

その貴重な軍隊手帳が金戸の森井信

一に保存されていた。軍隊手帳のほかに青年学校手帳・未教育補充兵手帳も残つており、兵役の内容や補充兵のことや青年学校の様子が具体的に知ることができました。

戦陣訓にかの有名な「生きて虜囚の汚名を残すこと忽れ」とある。昭和六年一月に当時の陸軍大臣・東條英機が示達した訓令（陸訓一号）で、軍人としてとるべき行動規範を示した文書であるが、現在ではこのなかの「生きて虜囚（りよしゆう）の辱（はずかしめ）を受けず」という一節が軍人・民間人の多量の無駄な討ち死に・自殺の原因となつたか否かが議論されているが、「戦陣訓」は複数の戦場において、玉碎を命令する際の命令文中に引用されており、捕虜になつた兵士を大本營は非国民の扱いをしていた。

昭和十六年の真珠湾攻撃時の日本軍人捕虜第一号となつた酒巻和男（海軍兵学校卒）は真珠湾攻撃で、小型潜水艇「特殊潜航艇」に海軍少尉として乗船した。しかし、機器の故障や米軍の攻撃などで座礁した。そこで自己爆破を試み、海に飛び込んだが、意識を失つた状態で米兵に捕らえられた。大本營は傍受した報道から捕虜第一号の

存在を初めて知り、同時に出撃した一〇名の写真から酒巻だけを削除し、「九軍神」として発表した。坂巻の家族は人々から「非国民」と非難された。それ以後捕虜になつた者たちは親族が申告し、ジュネーブ条約に基づいて家族に手紙を出すようなことも控えることが多く、結果的にその人達は未帰還兵（戦死または行方不明）となつたのだ。

軍人手帳は各自が携帯するものだが、常時携帯するものだと、當時の軍人手帳は、昭和十九年十一月一日から本邦外へ渡入（日本軍と本邦軍との間）の際に、軍人手帳（軍人手帳）と記載される。軍人手帳は、昭和二十一年二月一日から本邦内へ渡入（日本軍と本邦軍との間）の際に、軍人手帳（軍人手帳）と記載される。



太平洋戦争になると徴兵検査をうけて現役兵としてほとんどが入

未教育補充兵手帳

選ばれるが、それ以前は現役兵は抽選で選ばれるので、それ以外は補充兵として在郷軍人会名簿に登録されていた。

その補充兵が持つ手帳が未教育補充兵手帳や陸軍未入營補充兵手帳である。

手帳には勅諭、勅語、補充兵の心得、

在郷軍人会会歌などが記されており、

裏表紙の見返しには補充兵証書を入れる紙製のポケットがついている。また

身上明細や履歴を記入する欄、未入營

教育に参加した際にその旨を記して印

をおす欄があり、正確に書き入れてお

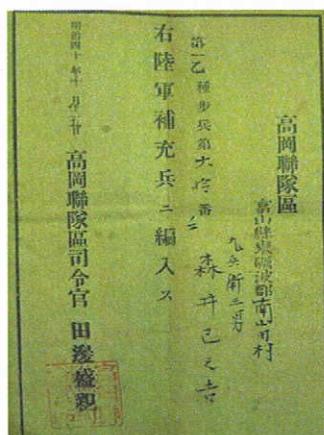
かなければならなかつた。この手帳は

常に奉公袋に入れ、召集や点呼の際に

は携帯することは携帶する必要とさ

れた。

未教育補充兵手帳や陸軍未入營補充兵手帳には戦陣訓はない。この未教育補充兵手帳は森井信一の父森井己之吉のもので、補充兵証書や徵兵検査の第一乙種歩兵検査票も保管されていた。



国民体力向上修練会

戦地からの便り

昭和十五年四月厚生省は「國民體力法」で日本全国で軍隊入隊前の若者に体力検査を実施し検査結果によつて健

民修練所という施設に入所させて体力

の強化を図つた。目的は「政府ハ國民

体力ノ向上ヲ圖ル為本法ノ定ムル所ニ

依リ國民ノ体力ヲ管理スル」とあり、

國が國民の体力向上を図るために体力

を管理をする法律であるが、國民の内

未成年の十五歳から徴兵検査までの

男子限つていた。十七歳の杉本外次郎

は村や学校で選ばれて体力測定を受け

て、さらに村から選ばれて県主催のこ

の國民体力向上修練会に参加した。

日本が中国と戦争状態に入り中國大陸へ従軍した竹山定次郎の便りが『城端時報』にある。

北支の治安に努めん

竹山定次郎

吾が部隊の戦闘状態は既に御承知の通り僥倖にも私も大小数回の戦闘に参

加奮闘いたし、軍人として最も光栄と

して喜んでいる次第で、ご出発の際皆様にお誓い申せし言葉にも背きこれと

いふ功もなく、多くの人柱となられし

戦友むの英靈に衷心より敬意を表し黙祷を捧ぐるとともに生き長らへおると

心苦しき感があります。小生は当地に到着以来二三回敗残兵の撲滅を期する

ため、十数里先の産額まで攻撃したるのみで専ら北支の治安維持に努め遠からず平和の日が訪れ、わが目的の達せ

らるるものと思ひます。只小生は今後

一層自重して姿なき戦友の英靈や、銃

後護りの御熱誠に対し万分の一にも

お報いいたしたき決意でござります。

何分御紙を通じて皆様へよろしくお伝えの程お願いいたします。

